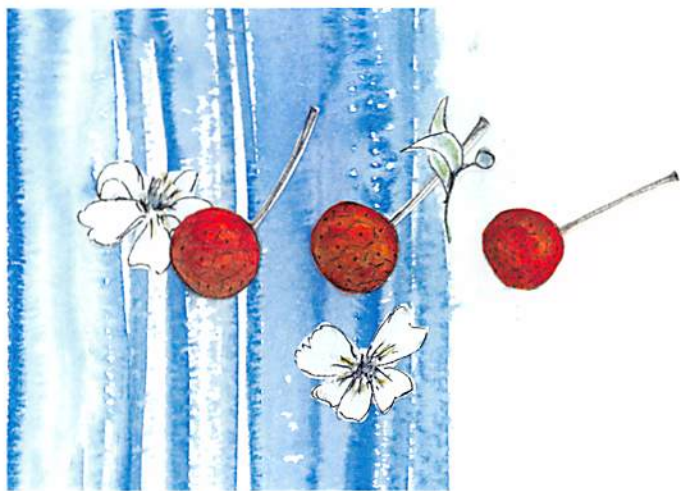


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025.12



令和7年12月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第12号 No.811

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二五年 一二月号 (通巻八二一号)

◇今月の二十首詠……八十年 大浪美雪 2

■作品A 中島央子・永田進一他 4

A 長野美佐子他 18

B 中江京子他 44

C 中村靖子他 54

A 内田泰子他 68

■オリープ集 古川一美・本田昌子他 34

◇今月の二人 根本京子・神林和江 14

私と短歌との出会い (280) 藤岡美幸 17

■鈴木剛之歌集『安積春秋』批評 磯田ひさ子 28

幻の馬を追いかけて もとむらしげと

幻の馬 磯田ひさ子

■〈第一歌集を読む〉33 菊地栄子 32

大浪美雪歌集『春潮』

―戦中生まれの歌― 菊地栄子

◇色のアンソロジー 〈紫〉 本元由美子 40

■遊覧寄港〈私と本〉 綾 央子 42

■歌壇月旦 今、藤原俊成 43

■十月号作品批評 西堤啓子 60

A……関根和美・石田明彦

B……伊東ミイ子・西畑睦子

C……佐藤光正・三浦美代子

オリープ集……高橋啓子

坂上直美

松本多摩子・紺野紘史

十首選 久我田鶴子 58

今月の二人・作品評 59

最近の歌誌より (編集部・藤田)

クリップ……80 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## 八十年

大浪 美雪

蟬の声に交りて聞こゆ鐘の音八十年目の敗戦記念日

勤め初めあふ人ごとに問はれたりあの日あの時何してをりし

みどり児のわれを見つめし父の手に待つたなしなる召集令状

産褥期の母とわれを残し征く父の思ひはいかばかりなる

みどり児のわれを抱きしめ母の見し三月十日の火の色の空

むづかるわれ周囲に詫びつつ佐賀までの疎開の子細母は語らず

語れない程の酷き疎開行いまさらながらありがたう母さん

われを抱き畔ゆく母にB29転げ落つるがに土橋の陰に

一九四五年生まれ  
森の会所属。

歌集に「春潮」「鯨の道」がある。

怪鳥に魔はれし夢に悲鳴あぐを繰り返したり思春期のわれ

『大地の子』読みて思ひ当たりたりうなされし夢そはB 29

乳呑み児のわれの見たるは何かの目 見てしまひしかB 29を

ガザの子もイスラエルの子も衝撃はトラウマとなり苦しみ続けむ

米軍の上陸と聞き母はまづをみなごわれを丸刈りとせし

通信兵と聞きゐし父は敗戦をどこで知りしか語ることなし

戦勝の鳥とふ佐賀のカチガラス戦に負けても県の鳥なり

戦前の職失ひし父と母ひき止めらるるも新宿忘れず

若き日の父への問ひは今われになぜ戦争を止めなかりしか

戦争の阿鼻叫喚図地獄図を見せるだけでは戦防げず

ちちのみの父の植ゑにし薔薇ピースいつしか枯れて忘れられをり

傘寿なり日傘雨傘核の傘何もささずに面上げゆかん

# 作品 A

中島 央子

日々

・森

盆が過ぎ花火大会も終り御湿りの無き日々の三十五度越え夫・兄弟歩まぬ日々を吾が生きて大谷野球の快音を聴く一休みひと休みしつつ小半時ボールを歩くゆつくり頑張れカレンダーの日時の進み去年の事その以前のことを思ひ煩ふ本棚の古きアルバムひとつそりと海外旅行の日々をあたむ今日ひと日坐して過ごしし時を悔い異常な暑さの美しき夕焼け満月が美しいと子に呼ばれ八月葉月の今を見てゐる

永田 進一

東京六大学野球百年

・山

早慶戦銀座で飲みしビールにもほろ辛き味惜敗もあり百周年神宮球場に記念碑建つ東京六大学野球の歓喜の歴史戦前の学徒出陣忘れまじ神宮球場雨の行進  
立教の長嶋茂雄は本塁打八本放ち記録作りぬ  
手に汗のハンカチ王子の斎藤佑樹早慶決戦涙の勝利  
敗戦後二年目にして連盟復活 東大初の二位となりき  
阪神の岡田彰布神宮が原点という野球人生

永塚 節子

仏座

・銀

炎天下バスを待つ間のしばらくをながさめくるるふうせんかずら甘藍の大きな葉の上昨夜の雨のひとつふひとつ光と遊ぶ立ち止まりまた流れゆく秋の雲検査結果を待つ間ひととき秋の日のあまねく届くベランダにほんのりほのかまゆはけおもと治りたるあかぎれまたもばつくりと傷というはこういうものらしとうとつに風のごとくに人は逝き人は残され日はまた昇る道の辺に愛する人なくほとけのざひっそりと咲く十二月半ば

仲西 正子

健康寿命

・沖

二人して健康寿命の平均をこえてこれより日々の大切  
思い立つ健康寿命へ足馴し前へ後ろへつま先歩き  
週三日デイサービスへと通う友そういうことか老い初むを知る  
まっすぐに葱坊主たつ玉葱にならぬけれども朝夕めである  
つんつんと葱坊主たつ十歳の少年ときおり知らん振りする  
男孫らと弾みて摘みつむサクランボ仕込みて二十歳の乾杯の酒  
たっぷり泡盛そそぎ待ちまた十年もののサクランボ酒

## 中村 博子

自選

・漣

目に留まり「桓武天皇と平安京」購いページ繰りゆく葉月  
亡き母の片目に絵筆もて描きしユーモラスなる「鍾馗」の眼力  
今は亡き歌の師山村金三郎「悪いこと言わへん辞めたらアカン」  
穏やかな洛東高校同期生五人はびわ湖ゆ疏水に揺れる  
十五階の部屋の窓越しにび色の湖面見渡す風早さんと  
見上げたる大屋根リングの高さかな行き交う人ら小さく見ゆる  
回廊へ上がればラッキー西工区や孫想いつつ友と巡りぬ

## 西堤 啓子

マンボウ

・天

脳を侵すウイルスが生む哀しみの欠片は積もり厚き層なす  
ケージから羽ばたき去った青い鳥川のほとりで囁りしとか  
一線を越えてしまった朝からエラーコードに指示され暮らす  
それぞれに傷をかかえて生きている さびしいマンボウ水槽に棲む  
十年をつまずきながら登り来て視界良好 美ヶ原  
アンタレス・シリウス・カペラ・ボルクス そう哀しみはテーマのひとつ  
ウラジミルの写真集書店に積まれた日 この殺戮を誰も思わず

## 浜谷 久子

手上産

・地

三人の同窓会は菌茎腫らし乾杯会食そしてカラオケ  
カラオケ店慣れいる友らはどこからか珈琲運んでマイク差し出す  
手上産はバツハのCD十二巻十五時間の編集収録と  
覚えないうわがひと言を告げようと六十年越え携えくる友  
亡き友も居るかのように弾みいる思い出一緒に語っていこうと  
同窓会今年が始まり二回目は来年互いの無事を祈って  
四秒の停留のち走り行く朝刊バイクの午前二時半

## 檜垣 美保子

午後

・晶

風あるとみえねど昼の鶴見橋東から西へ羽毛渡りぬ  
梅雨入りを知りたる午後は小鰯のざるに盛られてかがやくを  
おわりたる花と詠みつつ終わるとは何と問いつつ花のむらさき  
たわむれに水面に砂をこぼす人しずかな背中風のなき午後  
ふっくりとふくれて白きははの手をにぎればにぎりかえすは言葉  
かたときもはなれずあずきと語る午後くりやの窓に雪の舞い散る  
降る雪を見ていれば夜のわすれものレンジの中に牛乳があるよ

## 福田 庸子

けもの道

・今

いづれ原野に戻る日くるを描きつつ思ひ出の中の人と草刈る  
上流にダムなき川は透く水を広く保ちてくだりゆくなり  
水際に草喰む尻の白白と雌鹿幼くふり返りつつ  
人の手のゆき届かざる竹林の静かなる闇けもの道あり  
二月生まれの亡母に会ひたし向きあへる雪の山なみ恋しかりけり  
冬の光を照り反しゆく厚き葉に灯るぬくとさひと日和めり  
くさむらに被はれしまま年経たる土のかたちは棚田でありし

## 藤田 美智子

〈手の鳴る方へ〉

・新

鬼になるつもりもなく呼んでゐる逃げ回りつつ〈手の鳴る方へ〉  
暮れ方の冷氣ゆつくり揉むごとく羽ばたきゆけり一羽の鷺は  
飛びながら息絶える鳥はなきものかひと筋の雲茜に染まる  
行方を迷ふ風のしわざか裸木の枝枝右に左に揺れる  
くもの巣にはりつきゐたる花びらは風の遊びにしほしつきあふ  
春のゆふべを樹皮やはらかくなりゆけり本音を少し出してもよい  
隠れしまま見つけてもらへぬ幼子はゐないか もうすぐ夕暮れとなる

## 藤森巳行

外つ國の人

・銀

男性が日傘をさして街を行く氣候が文化を變へてゆくのか  
分斷を煽り支持得る政治家に正義はないと我切り捨てて  
外つ國の人の犯罪マナー違反それを排除の理由に上げる  
行政が取り締まるべき問題を外國人の排除に用ゐる  
日本人の嫌がる家屋の解体を外國人が担ひ働く  
外つ國の人との共存はからねば人口減少日本は滅ぶ  
排除する論理は捨てて共存を目指すべきなり世界の民衆は

## 本元由美子

村の景

・岡

歌を詠む心は何かと問はれば美しく生きなむ願ひなりけり  
坂の上に拡ぐる空の青深く仰ぐひと時哀しみを抱く  
東風ふきて何処ともなく匂ひ来る香に誘はれて沈丁花切る  
城山を覆ふ桜は朗々と百代をかけて城下を照らす  
梅雨じめりわが裏庭の紫陽花は健気に返す深き藍色  
採れたての野菜いろいろ運の葉に盛れば清かな迎へ盆なり  
大晦日やから集ひて食む蕎麦の年年歳歳はつか異なる

## 牧雄彦

何やら哀し

・大

この暑き泉下はいかに父母よ空は秋の色しばし耐へませ  
君が逝きしと聞きたるゆへカワセミが水面を飛べり夢かうつつか  
いま少し近づきて来よ逝きし汝が魂かと思ふ揚羽蝶舞ふ  
「よいしよ」とふ言葉と溜息増す日々よ席譲らるることに嘲れて  
夕暮に「お早うございます」と言ふ、廻すれ違ひつつお辞儀をすなり  
認知症らしき娘はにこやかに門扉を押して家に入らむとす  
大声で娘が母を叱りたり何やら哀し夕ぐれのみち

## 松永智子

影

・嵐

人を呼ぶ声とほりくる夜半目覚めきくことなく聞く犬の遠吠え  
人の声車の音の絶えし夜半遠くに犬の声ききねむる  
何を呼ぶ声にてあらむ闇にきく犬の遠吠え故なく寂し  
音のなく明ける東天ことはなく待つわれの影ふむことのなく  
十字路にさやうならのこゑのこし人遠ざかるを立ちて見送る  
人の影消えゆきし闇しばしみてさやうならをつぶやき立ち去る  
さやうならさやうならをくり返し遠くなりゆく人の影追ふ

## 松本多摩子

自選

・桜

それぞれの長き人生聞く夜は蜂蜜農家の巣箱の旅を  
この町で住みこの家で五十年氏神さまの梅の香やさし  
御殿場に花の季節に子を訪えば嫁にもらいぬとらやの富士春  
二十万万博入場者達成と娘の助けありわれも一人に  
娘や孫に見守られている人混みに振り返る目のあゝ温かし  
広大な桂キャンパス丘に建つ孫は五年目ここで学ぶか  
人混みをかきわけ急ぐ乗り換えは奇跡の六分歌友と走る

## 三浦好博

倒れられぬぞ

・桃

マッサージの後は足腰立たぬ我糸の切れたるマリオネットよ  
脊柱管狭窄症に効くといふ人魚を食べることにしました  
暑い日々人とし生きて水を飲む海の哺乳類はいかに水飲む  
骨盤の痛みに目覚め生きてゐる血流を聴く枕に沈み  
木には木の花には花の言葉あり我にも貧しき言葉のあれよ  
「地中海」に入れ入れと何人も誘ひて我は倒れられぬぞ  
生きるわれ死ぬわれ転生ありぬべし此岸に赤き彼岸花はも

## 三 木 まり 彗

・昂

ただひとつ見分けられるオリオンを探し真冬の空を見上げる  
息をのむほどに清しい彗星の軌跡は祝福ひと日のピリオド  
空にその軌跡を残す彗星の銀の尾ながく北へと向かう  
今まさに飛びたつ鳥の形して白木蓮は風に揺れる  
一陣の風すきてのち揺れている花が風を寿ぐように  
夜明けまえ小径を行けば濃密な樹木の匂い 水無月なかば  
隊列を整え北を差して飛ぶ渡りの群れに一羽おくれる

## 宮 本 靖 彦

摩耶山天上寺

・凌

待ち兼ねし雨颯風と連れ来たり夜半の雨戸を叩くは怖し  
長月の夜の暑さにドラセナの磨り硝子に見す故郷の踊り  
秋あかね群れとぶ朝暈咲きのさるすべりの紅淋しくなりぬ  
待ち待ちて入りにし万博中国館天井に届く山野四季の絵  
秋風に衣一枚重ねたり薄穂ゆるる摩耶山参道

摩耶夫人像に半世紀ぶり手を合はす愛らぬ笑みの優しきお顔  
山頂ゆ五十年ぶり神戸観る茶色の街がモダンになりて

## 三 好 聖 三 姐

・伊

夜の明けにしたがい色は薄れゆくシャムシル様の真南の月  
しわくちのペーコンエッグを食べたならゆらゆら喫煙のまんなか  
夜明けまでさあ踊りましようとしなやかに栗人形の少女が歌う  
きさはしにスノーフレックの花ひらき名取佳純の足音がする  
おちこちに木の実を隠しゆく秋の大雪山高原城の蝦夷栗鼠  
舞台にて凄む毒婦に醜女まで窮月美しき余貴美子姐  
客人とともに渡れば大室の山邊に初の雪は降りたり

## 御代田 澄江

核に痛みし人等の

・茨

百舌の高鳴き天より響く朝まだき落葉拾ひて心整ふ  
馥郁たる菊の香に満つ秋の日の耀ひのなか折る平和を  
日本被団協ノーベル平和賞に輝きぬ核に痛みし人等の努力はも  
自動運転車はゆつくり走る街なかを未来へ向ける人を救ふや  
暑過ぎの夏の重荷を如何にせむ梨は「煮え果」となりて落下す  
「日立紅寒桜」新種の桜吾が街の細かなる喜びとなりぬ  
春風雨は雪となり雹も降る東京の映像凍える彼岸

## もとむらしげと

大谷翔平

・そ

打ち砕くボールの悲鳴が球場にカキーンと響く異次元の音  
手応えを確かめ仰ぎみる空に時速一八〇キロの白球  
大谷の背後が一瞬爆発すバスター掲げて立ち上がる人も  
三塁のコーチと軽く手を触れてホームへ向かう大きな背中  
大谷にならむと誰も思わざりあこがれとしてただ仰ぎみる  
歩きつつとグラウンドのゴミを拾う姿見し日に恋に落ちたり  
偉人伝読みし心のベープ・ルース軽く上書きしたる翔平

## 桃 原 佳 子

知らず

・沖

コロナ禍の日々の辛さを思い出し空を眺めては溜息をする  
強き草こにしき草は根を張りてしんから日射しを浴びているなり  
乾きたる畑に根付きし苦菜にたつぷり水遣る我に遣る如  
うす紅の花を従え登りゆく昼顔の墓空を目指して  
金柑の木下に咲きたる彼岸花の赤や黄今年はやつくりと咲く  
九月尽藤袴が咲き出して揚羽蝶の畑に飛び来る  
わが家の隣の田んぼは消えぬれど雑草は人の心を知らず

## 山下雅子

天気予報

・習

大雨と猛暑のメリハリ梅雨という人は器用に言葉を編みぬ  
熱中症警戒アラート発動中聞き慣れぬ日本語ますます増えて  
要注意の線状降水帯なるが一瞬視界を打ちのめしたり

「今日は晴のち曇りでしょう」すっかりと単純なりし昭和の予報  
しつとりと百日紅に降る雨よ盛りし紅をねきらうごとし  
枝先につかず離れず並ぶ二羽と向き合い頷きて見ゆ  
立秋を過ぎて猛暑の続く日々自然の前に人は小さし

## 山野幸司

時

・沖

時重ね百姓仕事まなぬ自然の御手に田も畑もある  
空高くキリンのはだえツヤツヤと黄は皇帝の氣品にあふる  
友達に開まれ笑顔中学生もう戻るまい漢字三点

沈黙の長く続きし間なお広がり続く雲に連なる

輻重兵軍馬と共に生きたりし帰還の船に兵だけが立つ  
庭の道歩む頭上の星の数折れど止まぬ地上の戦  
黒色の変幻自在ぞキャンパスに今日の心を重ねて遊ぶ

## 山本

孟

わが視界

・大

三月の光座敷に並げたる新聞一面トランプ・ゼレンスキー  
ヘルバーの手料理われの腹満たす空の鍋持つガザの子に痛む  
夏休み盆の休みも籠り居て今日も孤独が肩に寄りそふ  
屋根はなく庭なくベランダにアロエ伸ぶ珈琲を飲み中空に住む  
帰り来て出かけしままの部屋に座しむくみし足を投げだしてをり  
婚礼の母の和箆宿替へのたびに傷みのいくつかは増ゆ  
隙間風入りて冷えたる日本間の火鉢の炭火手にやはらかし

## 養学登志子

秋

・凌

空と海屋島を左の脇息にイサムノグチの楕円墓碑立つ  
一段目の丘をのぼれば石舞台供華の花筒ここまでにてよしと  
楕円型はやや上向きイサムの碑目線をあわせ夕照に立つ  
あの丘はこの身ではもう登られぬどんなお花がお好みでしたか  
薄の丘イサムノグチの碑の裾野石材積み上ぐ永久のアトリエ  
「柚子坊が解りましたよ」小三の昆虫博士急ぐ来ぬ弟と  
草深き庭のかたえに八月のこおろきの音にしばしたたずむ

## 横田敏子

「ただいま」

・福

「ただいま」と声にならない声をかけ半年振りに玄関あける  
頬をさす風の冷たさ ああこれがふる里の風深く吸い込め  
公園の木木いっせいに芽吹き初め五月の空を押し上げていく  
草も木も目伸びゆく早苗なびかせて吹くはつ夏の風になりましたし  
背々と伸びゆく早苗なびかせて吹くはつ夏の風になりましたし  
取り込みし洗濯物を抱きしめてエアコン疲れの身体温む  
いつからか遠くを眺むること多し これまでのこと、これからのこと

## 磯田ひさ子

お宝

・森

浅草のランドマークになりすます助斗雲のオブジェたなびく  
神仏もとまどひをらむにひとしの浅草の街膨れ上がりぬ  
山門をくぐれば絵馬に線香にみくじにも群る 喜捨といふらむ  
横文字の絵馬も吊されひとときの善男善女が柏手を打つ  
宝船に七福神が描かれしお宝貼りぬ夢を頼みて  
さいせんは放り投げず落とすもの自らの作法に拘りながら  
来年はと言ひかけ口をつぐみたる夫亡き庭に水仙咲きぬ

## 市原やよひ

椎の実

・萬

コンクリの上にて焚ける迎え火のひそやかなれど夫を待ちたり  
新盆のあなたを迎え集いたるうから十人説経が包む  
暮れ早き椎の実落ちる道選ぶ夫の好みしこの道をまた  
夏帽子洗いて夏を仕舞いおりようやく秋の日差しに会い  
なじみなき鳥の姿に急ぎ取る夫の愛したポケット図鑑  
寂しさと一人の自由は同義語と決めて見ているひとひらの雲  
還暦の子を祝すれば横顔にふわりと夫の舞い降りており

## 梅本武義

里の今昔

・羊

久し振り氏神様へ初詣で遊びし石段竹杖突いて  
大雪の画面を見ては水雨降る庭に目をやる 幸せなか  
安倍批判なくて安倍派の批判のみしつくりゆかぬ思いの続く  
竹の子を持ち行き都市のはらからと里の今昔話して尽きず  
鳴く蝉の絶えたる里の静けさに百舌の一声木犀響る  
狡猾なブーチン目立ち進展なし独善責任転嫁のトランプ  
松茸を採りし頃の松嶺よ 樫の木々の落葉する音

## 大浪美雪

熱帯夜

・森

「熱帯夜ねむつたいや」と息子が歌ひしは三十度越えが数日の頃  
四十度に迫る昼過ぎ町中を歩く人なくカラスも鳴かず  
午睡より覚めても猛暑ふきげんになりゆくわれを持って余しをり  
酷暑の中何か忘れてゐるやうな 取り残されてゐるやうな  
すりガラスに透ける守宮の小さき指目一杯開き吸ひ付きてをり  
夜の庭に飛び交ふものの多くしてぶつかりてくる羽虫かなぶん  
然こもる庭にすだける虫の声明日は大荒れと思へぬ月光

## 奥田陽子

道

・羊

〈寒い寒い〉それが合図であつたのか崩れるがごとく夫うずくまる  
毎三つ食へたる父を喜びて子は船りゆく風の吹く駅  
十年をふたり静かに暮し来てなお続く道と思ひいたりし  
床の上に倒れんばかりに泣くわれを抱え入れたり人無き部屋へ  
夜半醒めてわが名を呼びていたりしと報告に聞く幾たびか聞く  
おもむろに静かに瞼閉じきたりてその眼ふたたびひらく事無し  
そこに居る それだけで善い人だつたり返し子の涙する声

## 神田鈴子

命を抱く

・大

嫁、孫のやさしき手紙胸を衝き言葉にならぬものを吞み込む  
賜りし新米の味ほのぼのとひとりの夜の卓は明るむ  
釣り上げて賜ひし太刀魚テールに銀白色のひかり放てり  
ひさびさに逢はむ友へのプレゼント添ふる紅葉の朱きひとひら  
雲間より光射し来て婚近き孫の面輪を明るく包む  
咲き満ちてくれる映ゆるさざんかの花びら散らす木枯しが吹く  
みどり児を孫より受くるわが胸に命を抱くこの手に抱く

## 上林節江

祖母役

・濱

全身で心を伝えし無邪気さはもう卒業か思春期の孫  
丁寧な物言いをされし寂しさよ私はどんな祖母なのだろう  
いたわられる人になりたくない私冬の猫背に棒杵を打つ  
残雪も早燦の野のかがやきも暮れずにあれよ 娘の笑ひもまた  
シルクロード旅してみたいと云うわれに「ダメダメムリ」と子らの合唱  
ひととせを看るとう習いサマルカンドに背き宝石のような喪の服  
星空に「月の沙漠」をくちすさむ少女のときも老いたる今も

## 菊地 栄子

落のとう

・海

別れ際自らタツチしてきたる二年生の子の温かき手が  
雀には雀の掟夕早く囀の幹に呼び寄せている

「包みましようか」「いい私のマフラーなの」藍の薄もの手触りやさし  
小銭にて支払う時のもどかしさ催促二回精算機より

「暗れ女」逃したるらし見渡しの池につきつき波紋を立つる

毛越寺の池の巖も老いにけり六年生の遠足遙か

またたける星座が着地したような土手にみどりの落のとう萌ゆ

## 河野 繁子

物指し

・雁

冬至過ぎ朝日の位置は折り返す地球はまとも 戦争やまず

トランプを選ぶアメリカ以前には矜持のありし大國アメリカ

みていない所で凍土は溶けつつけ五十年後百年後の地球

物指しはみんな遅えど縁あり繋がりゆけり曾孫七人め

九十は置いてけぼりか早口や横文字あいてに咀嚼せぬまま

「長い足」と押し込まれつつ乗せられてディサービスへ運ばれしひと

納骨の後の行方を思うとき娃の住処はやはり花筒

## 小林 能子

希望

・羊

はじめは「きんばあちゃんの花見山」桜だよりのもたらす希望

坂本龍一なき東北ユースの演奏をしづかに見守る小百合お母さん

焼夷弾の雨 焼け野原の横浜を知るディサービスの先輩やさしき

焼夷弾の雨とか占領軍のパレードとか新港埠頭起重機の昔語りは

「あの頃」をいまは懐かしむ焼跡の三角ベースと子どもらの声

賜りし「短歌カレンター」まくら辺に夏日ののちの梅雨を迎へぬ

もういやだ、いやだと思ふ雨の日の暮れてとつておき一粒のチョコ

## 近 藤 栄 昭

鳴子百合

・虹

山頂の人が手を振るこの峰へ一人になりてひと恋しくて  
テント菌が匂うテントに夜を過ごし感染したまま背負って街へ

wwと果ての家並みが笑っている彼の家も見んテレビのお笑い  
刈り口をあふれる稲を二把背負う汗と稲の香細い畦道

引き波の足元の砂さらわれて体傾き泳ぎはじめ

砂を抱き丸まった藻屑動かないいつかは消える波に叩かれ

鳴子百合葉下に乳歯連なりて危うく揺れる足元の風

## 近 藤 芳 仙

茶 所

・信

旅先のわづかなるひまを訪ねきて「和東茶カフェ」に一杯のお茶

かをりたて茶を淹れくるる人のゐる白磁に新茶のみどりが映えつ

喉越しのさはやかなればその後の茶葉をポソ酢に食みてゐるなり

茶の町は新茶摘みをふ静けさに初夏の日差しの中にかがよふ

ふむふむと日本遺産の茶畑を車にめぐり降りて眺める

茶畑の山頂にたつ防霜ファン箱の降りるは信濃もおなじ

かぶせ茶の畑もまじり一帯はパッチワークの緑にグレー

## 坂 上 直 美

時の移ろい

・天

「振り返らず黙して歩め」十三の春の朝に橋を渡りき

君が寝息傍えに聞こゆる心地してふと目を覚ます午前三時に

あの人が逝って五年 悲しみは薄らいでいく消えはしないが

ミチオシエあの日のままに追いたればこの世界には帰らざりしか

風少し涼しくなりぬ深呼吸吸よみがえれ命よみがえれ心

子どもらの呼びかわす声路上より秋天高く雲一つなし

青空に旗のごとくに見ゆる雲ああ我が心靡かせて行け

## 坂出 裕子 風

・洛

コロナ禍に酷暑に耐へしこの夏の過ぎゆきていま秋が来てをり  
秋などは永久に來ぬかと思はるる暑さなりしが風の涼しき  
生き返るやうな元氣をいただけり涼しき風に朝な夕なに  
何事もなかつたやうに秋が来て風に揺れをり青き木の実の  
人生もかくあるらむか過ぎゆけば苦しみことも遠き思ひ出  
幾十年 生き来しなるにはじめての秋かと思ふ涼しき風に  
生きゆかむ力いただく朝夕の涼しき風に月の光に

## 佐藤 道子

朝の道

・甲

「ベンチャン」とふ小さき老犬連れし女「この犬なくば生きられぬかと」  
大連れの老人と会ふ朝の道淋しき人の多きこの町

寄る犬の頭撫でればいとしげに「よかつたねえ」と飼主さんは  
ラリちゃんとおふのが習ひの朝の道大きな瞳のヨークシャテリア  
ラリちゃんは息子が特に好きらしく小さな足で駆け寄りて来る  
「散歩時間変りました」と飼主さんわざわざ道に待ちゐて告ぐる  
ラリちゃんに頼まれ来しかと息子が言ひぬ「会へなくなつて淋しい」と

## 篠原 まり子

明け暮れ

・羊

大花火窓より見える半分は美しくもあり悔しくもあり  
ゆくりなくテレビが映すがザの子に夕餉の箸は止まりしままに  
鐘の音に合せて黙禱ノーマ・ウォー平和記念日唯ひとりでも  
窓枠に望月の空あかね色絵画の如きひと時惜しむ  
よろこびと深き悲しみしんと「花のセレナーデ」よみ継ぐ日は  
外出はままならぬ日籠もり居に予報士曰く九月は八月  
もの捜し言葉捜しの明け暮れに色付くほおずき数えて五つ

## 柴田 登志恵

楔形文字

・天

冬の蒼蒼ゆく鷗まはり初め楔形文字は読み解けぬまま  
脳内に素数つらなり冬晴れの空飛ぶ鷗白く列なす  
ゆるやかな螺旋を描き飛ぶ鷗の消えてひろがる空の空なり  
帰らざる鴨十羽ほど川尻の花の筏に黙したるまま  
水河期の花咲きのこる野のはてに龍の鱗が雪となりゆく  
地下に入る電車の窓に映り込むわれの虚像が転写されゆく  
お別れはもう済みましたと去りゆきし猫はおそらく生家の地霊

## 鈴木 結志

出藍の誉れ

・福

正法の教えずかに詩を結び一字一句を念だめて詠む  
うたを詠む熱心喚起百花論誰にも言うまじわれのみのもの  
自己浄化美の追求にかかりて「生育正気」の表現を練る  
白萩は古歌の情緒をしのばせて庭の主役に出でて咲きつく  
ハーバード大学の師が称賛すころまで若がえらせる生きのレッスン  
「青は藍より出でて藍より青し」出藍の誉れ称えみじかうた詠む  
神武食糧穂からあげカジカ焼き酒のさかなの賀の一品

## 関根 榮子

長葱

・埴

年明けの希望のごとき一枝は蕾ふくらむ白玉椿  
袋よりはみ出す長葱を折らぬよう抱えて帰る夕ぐれの道  
一時間ほどの外出もバッグにはとりあえず水のボトルを入れし  
あの時に言えば良かったこといくつ年経ることに思い出しおり  
あふれ咲くミモザの家に人影の見えて声かけ一枝頂く  
誰も居ぬ社ははやも一月尽お焚上げの灰しろじろ残る  
糸巻の小さきを女雛の手に添えし五色の糸のほつれず流る

## 関根和美

スパイス

・埼玉

装飾もビクトリア調の優雅さに高床式の住まいはつづく  
景観の保存地域となりあう子の家もつビクトリアンスタイル  
肌くるきひとの南なみのうつくしく崩しにハロー笑顔とともに  
夕べには隣家より涼うスパイスの香はターメリックそれとクミンか  
なりわいは足セラビーの隣人の下宿者こんども日本のひとと  
広大なる修道院の一面は建て売りとなりちぢみゆく宗教  
学問の伝統かすかにたもてるやかトリック学校そのみ賑わう

## 高尾恭子

確かに生きる

・大

ウバユリはゆうらり揺れて折れそうで折れず世界のゆがみを仰ぐ  
運命は神の気まぐれ成るようにならぬ大人のハンカチ落とし  
手擦れした古書をバトンと受けとめてクリム色の頁をめくる  
すれ違う言葉とどかず持てあます 八十四円の切手のように  
お節介なGoogleフォトが物語る〈あの日の思い出〉青い波照間  
夕かげに立つ檜の木にドングリの赤ちゃんがいる確かに生きる  
はつ夏の森のみどりの風になれノッポの父はおさなを背負う

## 高津砂千子

紫蘭

・平

さざんかのあまたのつぼみ紅ふむ冬の入り口いろどることく  
白内障の手術を終えて車から玄関までをゆるりゆうるり  
いだきし菊の花茶を味わいぬほんのり香るひと日の終わり  
庭先に紫蘭群れ咲き蝶の飛ぶ五月の朝のこの平安や  
母も姉も八十路の坂を越えられず逝きしを思う水無月はじめ  
熱中症警戒アラートにも馴れて心とこの窓を開けつつ  
歩幅広き息子につきてゆく道のどこまで続く潮匂うあさ

## 滝田靖子

役割

・新

福寿草らふ梅浦公英それぞれの黄色に春を堪能してゐる  
郭公の飛び移り行くアンテナは町なかに茂る金属の枝  
永遠に理解し得ないいち人は永遠にもう会へないひとり  
役割を終へたから紅葉するのだと低い声に言ふ梢を指して  
役割を終へ紅葉するみづからの最期を祝ふ儀式のやうに  
役割の終はりて枝を離れゆく紅葉のひと世さよならさよなら  
それぞれのバス待つあはひしんと降り雪溶びてひとりひとり

## 田土成彦

阿形

・宙

持国天の阿形の口に巣を張りて蜘蛛には蜘蛛の口々を営む  
紀伊水道望む境内の自販機に午後の紅茶をゴトンと落とす  
ほたたと時雨が窓をぬらしゆく涙のやうに音もたてずに  
はづし置く入れ歯が笑つてゐるやうで何でもない日を過ごしたあかし  
ひと冬の土中を出でて蛭蟻が濡れる肌に月光を浴ぶ  
深海に何見えてゐしや蜚鳥賊の二つの目玉舌に転がる  
壁面を過ぐる飛燕の影すきて観音詣りの石段なかば

## 田土才恵

旅

・宙

飼いたも猫も居らねば二人して出かける今朝のさわわとして  
コンロンカその名に思い出だすもの驟雨のなかを駆け抜けし道  
虹の脚畑の中より立ち上がりいずこへ架かる旅ゆく道の  
吸い込まれ一人二人と消えてゆく赤い鳥居の重なる奥へ  
寿命など考えてみても仕方なし生きの限りを生きるほかなく  
夏休み来れば訪ねんと言う孫の帰省ひたすらスマホを握る  
生きゆける苦しさ声に出さぬまま去りゆく人よ熱暑の今を

## 玉井綾子

冷蔵庫

・羊

学校が慥だったから昭和には校内暴力、今は不登校

「行きたくない」子から言われて「休めば」と答える、冷蔵庫を閉めながらコンセントに挿さっていない充電器 三月、過きても子は起きられずただいまが沈んで溜まる玄関にヒールの音をことさら立てる受話器から聞こえる母の不機嫌な声音に今朝も安堵して行くブライムの上場企業の正社員 既得権益側に寝ている地下鉄が地上に出れば夕間暮れサイダー味の始かみ砕く

## 久我田鶴子

歌の縁

・羊

いまはもう治療に専念するといふ北を思へばこころの疼くあらかじめ祝ふといふをこのたびも きみよ苦しき日を乗り越えよ妻の歌をいちばんと褒めうたがはぬ川島さんなり逝きてしまへり突然の小野さんの死にいくほどを褒められたるやその人生の地中海とともにありたる青春期かがやかしきを忘れ得ぬままみつからはうたはずなれど歌のそば離れず歌の友をはなれず羊たち群れざるままに老いゆくを茂る樹が呼ぶひかりを散らす



## ●地中海叢書一覽●

(二〇二四・一一・二〇二五・一〇刊行)

・久我田鶴子著『海に金槌ーわが短歌小史』(第961篇) 砂子屋書房

・久我田鶴子著『冬潮を航くー三好直太の歌』(第962篇) 六花書林

・若松喜子歌集『車椅子のうた』(第960篇) ながらみ書房

・鈴木剛之歌集『安積春秋』(第963篇) 九曜書林

・本村誠人歌集『よしなしこと』(第964篇) 南日本新聞開発センター

・御代田澄江歌集『花のセレナーデ』(第959篇) ながらみ書房

\* 歌集についてのお問い合わせは、著者に直接お願いします。

\* 歌集・歌書等の出版の際には、地中海叢書番号を本社にご請求ください。

また、出版のご相談も遠慮なくどうぞ。

## 〈近刊〉

・藤森巳行歌集『無名集』(第965篇) 九曜書林

・市原やよひ歌集『海の光』(第966篇) ながらみ書房

## 今日の二人

### 光の中へ

根本 京子

朝空に一粒の星輝けり月の流した涙のように

もしかしてどなたがくれたプレゼント 夜明けの空に三日月と星

このピース何処へ嵌めれば良いのかと纏まりつかぬ心の整理

酷暑にはソーダー水に惑わされ短歌の味も辛口になる

月よりの使者のようなる流れ星願いを込めて空を見上げる

安達太良の湧水流るる原瀬川葦の葉陰に蛍の光

向日葵の花弁のごと日の光り僅かな窓の隙間より入る

大空を真っ直ぐ伸びるジェット雲不安な思い断ち切るように

草原に涼風が吹き虫時雨目覚めた蟬の声も集めて

ボサノバのリズムにのせて鳩が鳴くもう秋だよと歌うかのよう

夕空にオレンジの陽が眩しくて君の言葉が聞こえてこない

赤と黄の紅葉を潜り木洩れ日は貴方の赤い靴を照らして

夜明け前そっと両音奏でてるバッハの調べメヌエットかも

### 夏の空

「空がこんなに綺麗だなんて」ボランティア活動をして寿ちゃんに巡り会えなければ、短歌との出会いもなく綺麗な空に気付くことさえなかったかもしれない。

朝の四時、まだ夜も明けきらぬうちに西の窓を少しだけ開ける。真っ暗な空を眺めたら約一時間程の野菜の収穫へと向かう。東の空に金星を見付けた時は、浮き浮きしてしまふ。そのうち雲の合間より太陽が差し込み始め、やがて蟬達も目を覚ます。賑やかな一日の始まりだ。収穫した夏野菜を朝餉のテーブルに載せ彩りを添えるのが私のルーティンだ。

ふと思い起こせば今日まで沢山の友達に支えられてきた。亡き寿ちゃんに招かれて地元の短歌会へ仲間入りをし「県歌人会」「郡山合同短歌会」と少しずつ学びの道へと歩き始めた。そして「藤田美智子先生」に巡り会えたことが何よりも幸運の極みである。幾度か先生の批評会にて学ばせて頂いたことがあり丁寧に理解し易く、感銘を受けた。その後、郡山の横田敏子支社長よりお声を掛けて頂き念願の「地中海」へ入会することが出来た。地中海の皆様、初めまして。どうぞ宜しくお願い致します。